
ちょっと怖い小咄

半平太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつと怖い小咄

【Nコード】

N7207G

【作者名】

半平太

【あらすじ】

ベリーベリー・ショートホラー。基本ブラックジョークやパロディに近いですが、たまたまに、本当に怖いのもあるかも？

小咄其の巻 『エレベーター』

どうもタイミングが悪くて、いつもえらい目にあう。

深田半平太は、点滅する階数のボタンを見つめながらひとりごちた。バスや電車もよく乗り越したり、遅れたりするし。

「御利用階数をお知らせ下さい。当エレベータは間もなく最上階に到着致します。」

デパガのよく通る声が聞こえる。

「屋上でございます。お降りのかたはいらっしゃいませんか？ …では、上に参ります。」

眩いばかりの優しい笑顔で言った。ああ、降りなきゃ、と思う間もなく扉は閉まり、また上昇する。そしてまた再び開いた時・・・霞がかつてはいるが、明るく静かなところに着いた。遠くに花畑や河が見える。

（何故だろう）

半平太は考えたが、川岸に懐かしい顔が見えた気がする。今度こそ降りようとした、が。

「お降りのかたはいらっしゃいませんか？ では下に参ります。」降りるのに、と言うより前に扉は閉まり、下降しはじめた。客は自分ひとりになっていた。エレベータは最下階を突き抜け、どんどん下へ。デパガは邪悪な笑みを浮かべている。

タイミングが悪くて、いつもえらい目にあう。半平太はひとりごちた……。

<おしまい。>

小咄其の式 『怪奇電送人間』

「 そんな次第で、我がエクスプローラ社がこの度発売する次元転位装置“リアル”ブラウザ”は過去のどんな機種より格段と優れており、まあ最早ライバルはないと自負しております。」

ひととおりの説明と概念を述べた後、隣にあるいかつい箱をぼんぼんと叩きながら、開発担当のビル博士は会見に集まった記者たちに余裕の笑顔を見せた。

「最初の転位装置が発表されてから随分かかりましたね。エクスプローラ社は3番手ですよ。」
意地の悪い記者が言った。

「はん、最初の名誉を得んがために愚行を重ねたグールグール社製のがらくたのことですか？ 八工と合体したり、機械と合体したりでそりやもう散々な評価でしたな。あれのせいで信用回復に時間がかかったと言ってもよいでしょう。」

博士はひるまない。

「だいたいファイヤーボックス社のまがいものも似たりよつたりだ。個体を識別し、電子レベルの分解・再形成？ 八工は混じらなくても体内の微生物と合体して目も当てられない化け物を作っただけじゃあないか。水虫と合体したのもいたっけ」

さすがに記者も気色ばんだ。

「で、では貴社のリアルなんかはそういうことは
「絶対ありません。空間そのものを次元的に切り離し時間のベクトル乗算し…失礼、その説明はもうしましたな。論より証拠です。」

まもなく電送人間第1号がこのリアルブラウザの中から現れます。これから新しい産業革命が始まりますよ。乗り物は観光の手段としてしか意味をなさなくなるのですから。」

ビル博士がキーを操作する。はたしていかつい箱から閃光がもれた。扉の前のパネルには地球の裏側のエクスプローラ社の7・5バージョン機から最新の8・0バージョンの機種へ社員をひとり送った、と表示されている。博士は自信満々に扉を開けた。

出て来た男は一部が女だった。髪の一部は金髪で、皮膚の一部は黒人だった。ある部分は金属でまたある部分は木で、そして大半は裏返っていた。

「しまった。バグった・・・文字化けだ・・・。」

<おしまい。>

小咄其の参 『お役人のお仕事』

(司会)

「えー、間もなく干拓地問題も鳥インフルエンザも光熱費も、騒がれないのをいいことに放任状態にした農水産大臣さまが、異常プリオン蛋白…いわゆる狂 病問題の釈明をしやがります。」

(大臣)

「ゴホン！ ええ、今回の騒動はわが農水産省といたしましてもまことに不測の事態であり、ゆゆしき問題と認識しております。しかし！ 牛肉の安全性は以前より保証されており、万全を期しておる次第で、それを知らしめるべく皆様にはこの大型牛丼チェーン『よしな屋』にお集り頂いた次第であります。」

(司会)

「大臣も牛丼のような大衆の食べ物を食されるのですか？ てつきり赤坂あたりで高級ステーキを馬鹿喰いして安全性を御自分の任期期間だけアピールするのかと」

(大臣)

「ししし失敬な！ こう見えても私や庶民派で通っておるんですゾ！ あ、ああ店長、松坂牛丼のレアを頼もうかな」

(店長)

「…あの、そういったものは無いんです。盛りの多さとか、つゆの加減とかなら変えられるツス。」

(大臣)

「あ、ああそうだったいかんイカン遺憾。た、たしかこう頼むん

だっ たな…？

” つゆダク、ネギ抜き、プリオン抜きで一丁！！！”

(司会)

「……………」

(店長)

「……………」

(大臣)

「……………」

<おしまい。>

小咄其の四 『宇宙からの帰還』

「…地球か。なにもかも皆懐かしい……。」
亡き家族の写真を胸に、老兵は静かに呟いた。

14万8千光年を旅し、ようやく地球へ戻って来た、宇宙戦艦ヤマトンチユ。しかし、その代償はあまりに大きかった。ぼろぼろの戦艦、多くの戦死者…。艦長代理コダイ・モドルは最後の戦いで犠牲になったファイアンセのアワモリ・ユキを抱き上げ、眼前を覆う大スクリーンを見た。

「ユキ、帰ってきたよ。」

紅く干上がった、だが紛れもなく我々を産み育んだ母なる惑星がそこには映し出された。敵星一つを滅ぼしさんざ虐殺してきたことはどこかにほっぴり出し、

「愛し合うことが大切だった。」

…と、似非ヒューマニズムなたわ言を吐き、コダイはその場に立ちつくした。

（もうすぐ帰れる、そしたら結婚だ…。結婚するはずだったのに！）

1年間禁欲生活を送ってきた遠洋漁業の船員のごとく蓄積したフラストレーションのぶつけ先を見失い、お若い艦長代理さんはおおいおい泣いた。

第一艦橋から肉眼で地球が見えるころ、偉大なる老兵…ヤマトンチユの艦長オキタは、むっくり起きた。だが悲劇は悲劇を呼ぶ。冒頭のお決まりの文句をたれ、彼はまた永い眠りに就いたのであった。
「？」

その時奇跡が起こった。ユキのネグリジェ越しに押し付けられた胸から、微かな鼓動が響く。たった今英雄の死を見届けた船医が驚

きの表情を浮かべた。コダイは、大人として恥ずかしい行為をしたタレントのように半ベソをかいていたが、ようやく最愛の女性がお伽話のお姫様のように目蓋を開けたのに気が付いた。

「ユキ…。ユキ！ 生き返ったんだな!？」

コダイの問いかけに、うつとりとした表情で彼女は応えた。

「わしじゃよ、コダイ。」

<おしまい。>

小咄其の四 『宇宙からの帰還』 (後書き)

大人として恥ずかしい人ではなく、木村さんが主演で映画化される
そうです。無理〜。

小咄其の伍 『呪いの携帯電話』

夕チの悪い噂だと思っていたのに・・・。

手にした携帯電話が嫌な汗でしめり、生暖かく感じる。不可思議な生物でも握りしめているかのようだ。片山龍次は、おぞましさに身震いを禁じ得なかった。

その画面を見た者は1週間後に死ぬという都市伝説。『ダサ子の呪いのサイト』を開いてしまった彼は、あれこれ解決策を試みた。だが、いずれも水泡に帰す結果となった。自室に閉じこもり、日に日にやつれる片山。そうして、とうとう期限の1週間めを迎えた。

ピコピコと、深夜に着メロが響く。

「ひいひいひいっつっつっつ!!」

手にしたくないのに、見たくもないのに携帯の画面を開く片山。ワンセグの画像に古い井戸が浮かび上がった。黒髪をざんばらに垂らし、ずるり、と女が井戸からはい出してきた。そのままぎこちない動きで携帯の窓のこちら側に近寄ってくる。

「ダサ子だ! ダサ子は本当にいたんだ!!!」

前髪の隙間から狂気の目が光る。震える手をなんとか動かし、片山はなんとか携帯を部屋の中央に投げ出した。携帯は画面を上にし、カタカタと動いている。それをムンクがアツチョンプリケをするように彼は見守るだけだった。ダサ子の爪のない指が、ずるりと画面からのびる。

「ぴぎゃああ~~~~っつっ!!!!!!!!」

しばらく恐怖で動けずにいた片山だったが、どーもまだ生きているようだ。

「?」

恐る恐る携帯の方向を見てみると、画面窓から指だけ出して、あと

小咄其の六 『某諜報部員の冒険』

E国諜報部員00への7番、ジエームズ・セメダインは迷っていた。犯罪組織のアジトを壊滅したまではよかったが、宿敵デーブス・ペクターの罠にはまり、爆破装置付きの部屋に監禁されてしまったのだ！

「うーむ私の好物メロンパンを置いて部屋に誘い込むとは、スペクターめ、なんと悪知恵がはたらくヤツだ！」
お決まりのアナウンスが流れる。

「このアジトは自爆装置がセットされました。爆発まであと…」
やっと起爆装置を発見したジエームズだが、コードは赤と青の2本がのびている。ど
ちらかはトラップだ。

さあ赤か？ 青か？ どっちだ???

(下記からお選びください)

1. やっぱり赤を切る
2. いやいや青を切る
3. どーしよう？

「1」

赤だ！ ジエームズはコードを切った。はたして!?

「爆発まであと30秒…」

「おいつつ!!!!」

「2」

青だ！ ジェームズはコードを切った。はたして！？

「爆発まであと……」

アナウンスは止まらない。

「くっ、ここまでか！」

「爆発まで……あと30年……」

・
・
・

「おいコラっっ！！」

「3」

どーしよう？ ジェームズは迷った。赤かな青かなどっちなかな？
???

「爆発まであと30分……」

そのアナウンスさえ耳に届かないほど、彼は考えていた。その後30分ほど。

<おしまい。>

小咄其の七 『巣箱の鳥』 (前書き)

今回のちょっと怖い小咄には残酷な描写があります。ご注意ください。
い。

小咄其の七 『巣箱の鳥』

町外れの神社の裏にある巨木、名前はないがいろいろ曰くがあるらしい。

古い鳥の神様を奉っており、一心に願いをかければ人を鳥に変化させ、飛び立たせるというのだ。木の前の祠はちょうど人が入れる大きさである。酔狂な者なら中に入ってみようと考えられるかもしれない。刑事という仕事柄、私は中を覗いてみた。手配中の強盗殺人犯がこの付近に潜伏しているらしいのだ。万が一、ということもある。

ぎい、と古ぼけた扉が開く。

中は…淀んだような暗さ。いくら目を凝らしても中が見えない。かといって人がいる訳もない。葉で廻りが薄暗いせいだろうか。諦めて扉を閉めようとしたとき。

「こゃあ」

木の実を啄ばむ小鳥を追って、猫が中に飛び込んだ。

鍵がついているわけなし。踵を返していた私は気にもとめずそのまま神社を去った。

三日後、祠の嫌な言い伝えを聞き、胸騒ぎがした私はまた巨木の前立っていた。伝説によると、邪な者しかその祠はくぐれない、というのだ。

くぐる？

と、いうことは、あの祠には抜け道があるのでは？ 昔の罪人が逃

れるためあの場所に隠れ、なおかつ他の場所へ逃げ出せるようになっていたとしたら。

私は祠とその背後の巨木を調べた。：だが、そんな仕掛けなどにもなかった。あったのはちょうど巨木をはさんで対の場所に掛けてあった、鳥の巣箱だけである。落胆し、帰ろうとしたその時。微かな鳴き声が聞こえた。幻聴ではない。猫の鳴き声だ。どこから？

耳を澄ますと、それは、その巣箱から聞こえてくるのだった。とりたてて変わったところもない木の箱。だが、その穴は何も見えず、濁ったような黒が蠢いているようにも思えた。

また猫が鳴く。

今度ははつきり聞こえた。そして。ぐじゅる、と柔らかい何かと液体がたてるおぞましい音。

私は巣箱の穴を覗き込んだ。鼓動が早くなる。つばを飲み込む音さえ聞こえる。精神は見るのを拒絶するのに、目を離すことができない。黒い穴は、私を見つめ返す瞳となっていた。

「ぎぎ、にゃあぁ」

突然噴出す血しぶきとともに「それ」はズルりと飛び出してきた。咄嗟によけた私は吐き出されたものに目をやった。

鳥の頭の大きさに、潰され、ねじれ、伸ばされた肉の棒塊。嘴のように尖った先は血まみれだが猫の鼻のようにも見えた。恐怖に私は立ちすくんだ。

携帯が鳴る。我に返った私は電話を受けた。犯人が2日前に祠に入ったのを見たという通報があったらしい。

ゆっくりと、

私は暗く濁った穴を眺めた。再び聞こえる穴の奥からの音と叫び声を聞きながら。

< 終 >

小咄其の八 『正義の味方』

小咄其の九 正義の味方

「私は銀河つるとら組長、ソフィーである。」

いきなり会社員、月形半平太の前に現れた光の巨人は頼まれもせんに自己紹介を始めた。

「君は今まで1度も嘘をついたことのない正直者だそうだな？ 私はそういう心の正しい若者を探していたのだ。君を地球を守る正義の味方、超つるとらスーパーマンに任命する。平和を乱すものが現れた時、君はいつでも私のよーな超人に変身できるのだ。んーお礼はいいからね。」

こちらの意見もへったくれもないまま、ソフィーは続けた。

「さあ、変身だ！ ただし正義の味方はその正体を他人に悟られてはいけない。くれぐれも見つからないように。いざとなったらしばってくれるコト。」

「ああ、は、はい。」

見つからない様に嘘をつかなきゃなー、と思ったとたん、正直な若者は正直ではなくなつた。

月形半平太は遂に変身することはなかった。

<おしまい。>

続・正義の味方

「私が銀河うるとら組長、ソフィーなんだから。」

なんだからと言われても困るが、月形半平太の前に現れた光の巨人はなおも話し続けた。

「こんだけ就職難なのに正義の味方になりたいってヤツはいないんだよね。そこで選考基準を甘くした。おめでとう、今日から君は地球を守る正義の味方、『超うるとらスーパーマン（パート）』に決定した。んーお礼はいいからね。」

相変わらずこちらの意見もへったくれもない。よほど敵が多いのだろう、自分の正議論ばかりゴリ押ししてくるどこかの国の大統領のようである。

「さあ、変身だ！　すぐに50mの巨人になれるぞ。あとはテキトーに」

「ああ、は、はい。」

まばゆい光に包まれると月形半平太はソフィーそっくりの姿になった。みるみる巨大化する。10m、20m…。

そこで半平太は思い出した。自分が高所恐怖症だったことを。急激な視線の変化に立ちくらみ、50mの巨人は周りのビルを崩し、広場を荒らし、ソフィーを押しつぶしてぶっ倒れた。

< 今度こそおしまい。 >

小咄其の九 『犬と少年』

「おじいさんが死んじゃった。どうしよう、パトラッシュユ？」
「わん」

絵を描くことと犬の世話だけが好きな少年フランコ『ボウケン』ネロ。彼は寝たきりの祖父の年金だけで暮らしていた。介護もせず、たまに外に出てもブラブラしては公共物や店のシャッターにペイントスプレーで落書きをする程度。

しかしその祖父も亡くなった今、彼を援助してくれる者は誰もいない。ヤンキー時代に付き合った少女アロアは「不良がうつる」と親が会わせてくれない。

「わん」
「ピトラッシュユ、おなかが空いたんだね。でももう食べるものもないんだ」

「わん」
「おやめプトラッシュユ、僕を食べても美味しくないよ。共食いもおやめ。あ、おじいさんはどうしよう」

モラルも何もない現代っこのネロだが働く気力はもつとなかった。仕方なく半ダースの犬とフラダンスを踊る日々を送っていたが体力も限界に近づいた。彼の最後の望みは冬コミケで同人作家の生絵を見ること。もちろん違反で前日から並んで。やっと開場し、その絵を見ることができた時、飢えと寒さで彼の命の灯火も消えようとしていた。

「わん」
「疲れたかい？ ペトラッシュユ。ぼくも眠いんだ……」

その時、どこからか天使のような声が聞こえた。もと彼女のアロア

だ。彼女の悲痛な声がドームに響く。

「寝〜ろ〜」

暴君は永遠の眠りについた。

「わん×6」犬たちは早々に立ち去った。何人かの同人作家さん達も巻き添いで寝た。

<おし

まい…失礼しまひた^^;>

小咄其の拾 『輪廻転生』 (前書き)

今回の小咄には多少残酷な描写があります。

小咄其の拾 『輪廻転生』

(其の拾)

「…火付け、追い剥ぎ、かどわかしは言うに及ばず。殺人の際、快楽の為に死体を切り刻む所業は悪鬼の如し。よって下手人の榊原薔薇太郎を牛引きの刑に処す」

悪逆非道の限りを尽くした薔薇太郎にも最期の時が来た。

「けつ、死んでも生まれ変わって、また同じ悪さをしてやらあつ！」
呪詛の言葉を吐き続ける男に、奉行はさらりと言った。

「生まれ変わるんなら身も心も綺麗になって、人に役立つことをするんだな」

この時代の極刑、『牛引き』とは五体に縄をかけ、それぞれを猛牛に引かせてバラバラにするという残酷極まりないものである。因果応報。流石の極悪人も、手足も首も引きちぎられての無惨な死を遂げた。

ところが。

神の気紛れか悪魔の陰謀か。薔薇太郎の執念がそうさせたのかもしれぬ。時は移り、平和な現代にその男は転生した。

(けけけけ。またこの世でも面白可笑しく暮らしてやろう。お、ちようど前から可愛いガキが)
純粹可憐な少女を毒牙にかけようとした、が。

(あ、あれ？ 体が、う、動かねえ…?)

榊原薔薇太郎はその時、自分が野に咲く一輪の薔薇に生まれ変わったことを知った。ずしん、ずしん。近づくと少女は自分の数倍も巨大である。

「まあ、きれいなお花。」

少女は歩みを止め、道に埋まった彼の身体を無理矢理引きずり上げた。

「ブチっ」

根の部分：薔薇太郎の下半身はちぎれ、刺や枝葉といった腕や肌の一部はもがれ、血の代わりに樹液は流れる。彼は声にならない叫び声をあげた。

「いい香り」

少女は花の香りを楽しんだ後、好きな異性でもいるのだろうか、花占いを始めた。

「ブチ、ブチ、ブチイ」

（綺麗になって、人に役立つ…）

引き裂かれた頭で、薔薇太郎はぼんやりと奉行の手向けの言葉を思い出した。

少女は占いの結果が気に入らなかったか、最後に花の頭の部分をブチりともぎ取り、投げ捨てて去っていった。

<おしまい。>

小咄其の拾巻 『国家からのプレゼント』

第十話 国家からのプレゼント

軽佻浮薄なこの国で、最初は勢いが良かったが今やすっかり落ち目の首相、小泉半平太から全国民に向けての演説があった。

「あー、国民の皆さん、景気回復も構造改革もまだまださっぱり進まず、ほんとうに申し訳ない！」

全然申し訳なさそうではない声がこだまする。

「せめてものお詫びに、政府は国民ひとりひとりに、新型携帯を無償でプレゼントすることにした！ おじいちゃん、おばあちゃんから赤ちゃんの分まである。存分に使ってほしいっ！！」

税金も援助もいやだがタダならなんでも欲しい、という国民性にこの政策は受けた。瞬く間に携帯普及率は100%を超えた。首相はまた「時の人」に返り咲いた。

官邸でにやつく首相に秘書が静かに声をかけた。

「総理、今回はうまくいきましたな」

「ああ、おかげで国民全員にID番号を登録することが出来たよ。やつら勝手に個人情報もドンドン入力するし、代金は税金で引かれていることも気付かんし。・・・住基ネットなど使わんでも最初からこーすりゃ良かったんだ、わははははは、は、は。」

得意満面で部屋を出ようとする首相は思い出したかのように秘書に囁いた。

「待ち受け画面に私の顔写真、着メロに我が党のテーマソングをそれとなく紛れ込ませるのも、忘れるなよ、うん」

秘書は頭を下げ、首相を見送った。

<おつれさ。>

小咄其の拾貳 『ネットカフェにて』

とあるネットカフェの一室。

先月会社をリストラされた加藤半平太（仮名）は、今日も不満のありったけをネットの巨大掲示板に書き込みまくっていた。

「うおおお、みんな格差社会が、政治が国が、オレ以外の全ての馬鹿共が悪いんだーっ！」

エキサイトした彼は壁をガンガン蹴り、コップを投げつけ、雄叫びをあげる。

「そうだそうだ」

「もつと言つてやれ」

「ははは」

「アンタ神だよ」

「世の悪どもに、制裁を！」

ネットに書き込めば、すぐにレスがつく。ネカフェの外では何も言えず、言っても無視されるだけの半平太だったが、ネットの世界では誰もが彼の信者であり、崇拜者であり、太鼓持ちであった。たまに批判者も混ざってはいたが。

そして…

「これから…人を襲う！」

思い余ってそう掲示板に書き込んでしまった。途端に掲示板は大炎上となった。

「犯罪者、ハケーン」

「いいぞ〜！」

「予告キタ

(。 。)

」

「やれやれ」

「通報シマスタ」

「氏ねよ」

騒ぎ、煽り立てる他の書き込み。その時、

「俺もやる。」

唐突にもう一人、犯行予告をする者があった。

「手始めに今いる店の客をやる。」

同志ができたことに勇気付けられ、半平太もそれに呼応した。机を打ち鳴らし、また掲示板に書き込んだ。

「おお、やれやれ!」

すぐにレスがつく。

「すぐにやる。さっきから隣の客が壁を蹴ったり叫んだり、超ウゼエ。手始めにそいつを血祭りにする」

<おしまい。>

小咄其の拾参 『レッドデータアニマル』

第十三話 レッドデータ・アニマル

「最近流行ってんのってサ、タマちゃん？ 風太？ それももう遅いの？ いつの間にかトキだっけ、あの鳥。騒がなくなっちゃたネ」。

「キャハハっ、ハンペン、遅れてる〜！ ってゆーか、無理ないか、長いこと留学して、日本、帰ってきたばかりダモンね」

喫茶店。浦島半平太の言葉にガールフレンドの鮎子は笑って応えた。

「いくら天然記念物だって、いっぱいいやあ誰も話題にもしないわヨ。珍しいからみんなチャホヤするだけ。ジヨウシキじゃん」
くったくのない彼女の言葉に、そんなもんか、とうなずく半平太ではあった。

「まったく世間から取り残されちまうよナ。せつかく帰ってきても、なんだか自分だけ外国人みたいだ…あ、そーいや、つむじとヘソ、いっしょに押すとゲリするって、なんかの雑誌に書いてあったケド、あれ、ほんとだったんだなー！ オレ、初めてわかったヨ。」

「…。」
鮎子の返事はない。

「ん？」

「……。」

「あれ、オレ、なんか変なこと言ったか？」

鮎子の奇妙な顔を訝しんだ半平太だったが、すぐに返答が返ってきた。

「なんでもなーい。喫茶店で下痢とかそんな話しないでよもう、サ

イデー！」

「あ、あはは、ごめんごめん。お、オレちょっとトイレっ。」
場が悪くなったか、それとも本当に催したか、そそくさと席をたつたボーイフレンドを見送ると、鮎子は携帯を取り出し、無表情に話しました。

「…もしもし、あ、*****です。はい、今確認しました。彼、間違いなく『純潔種の日本人』の生き残りのひとりです。

ええ、我々+++++が彼等と入れ代わって、あまりにスムーズだったので危うく全滅させるところでした。はい、注意して捕獲します。種の保存のためにも……。」

鮎子は周りのウェイター、客全員に目配せする。彼らもまた目配せしあい、うなずいた。

「お待たせっ。アユ、今度はどこ行くっか？」

「そうね、うふん、二人きりになれるトコ、かな？ ひとりでどこか行っちゃ駄目よー。キャハハハ。」

<おしまい。>

小咄其の拾四 『インフルエンザ』

小咄其の六拾伍 インフルエンザ

春とは思えない木枯らしの吹く街。たちの悪い疫病が流行り、人々は皆マスクをかけ、生気のない目でふらふら歩いていた。疫病のもととなった家畜は処分され、お役所や病院は感染を防ごうと躍起になってはいるようだが…。ビルの巨大なパネルに映し出されるニュースも不景気だ。官は汚職、民は不祥事、学校はいじめ、家族は殺し合い。

(これも流行り病だろうか…?)
そんな馬鹿げた考えさえ浮かんでしまう。そんな時。

「地球の皆さん、こんにちわ」

唐突にビルの大画面は切り替わり、銀色の、「いかにも」な宇宙服を着た人物が映し出された。異様に黒く大きな目がゴーグルから覗く。

「へ、まるで宇宙人だな」

誰かの嘲りの声が聞こえる。その声に呼応したかのように、大音響で音声が響く。

「わわわ我々は”オーナー”です。地球の皆さんにはタイヘン申し訳ないいいのデスが、悪質な病原菌が流行しましたタタタタザア。

突然の雨、と思うとそれは消毒液の臭い。それを撒いているのは…本当に巨大な、銀色の円盤だ。

「お、おい」

「マジで、宇宙人、だ…」

人々の不安そうな声。

「本当ででです。皆さんは、”病んで”います。我々は必要なぶんだけ育て、搾取してきましたが、もうここまで感染しては仕方がありません」

よく見れば彼の着ているのは、レトロな宇宙服ではない。感染防止のためのスーツだった。

「この星は全部消毒して、『養人場』は閉鎖します。残念ながら全員、処分しなければ。アア、大赤字ダダダ」

”オーナー”はゴーグルを下ろし、ガスボンベらしき物を操作し始める。

・・・本気のようにだった。

<おしまい。>

小咄其の拾四 『インフルエンザ』（後書き）

（リアルで被害の遭われた皆様、たいへんたいへん失礼しました）

小咄其の拾伍 『レーダー探知機』

深夜の高速道路。けたたましいアラームがランプとともに車のダッシュボード上で鳴り響き、人工的な女性の声がした。

『ステルスにご注意ください』

「うんっ、これは…そろそろスピード、落としたほうがいいな。」
運転している三船半平太はちら、と機械を見る。

「おっっ、これが新しいレーダー探知システムか？」

助手席に座っていた友人があまりの派手さに驚きと感嘆の声をあげた。その反応に三船は満足そうに答えた。

「すっげえだろ？ しかも」

先刻とは違う音色で銀色の小箱は、『Nシステムを受信しました』と告げた。

「へっっ、こりゃいいや！ これならオマワリなんかチヨロいや」
三船はさらににんまりとして言った。

「だろだろ？ さらに」

機械は次々と警告し、点滅を繰り返す。

『オービスに注意。あと50メートル…』

指示に従い、事なきを得た三船は破顔のまま一般道路に降り、車を爆走させた。すると、

『危険です！』

「お、おい、”危険”って？」

さすがに友人もうるたえた。

「あー、大丈夫。パトカーがどこかで張ってるんだろ。よくある事。」

「こともなげに三船は切り返すが、アラームとランプはさらに激しくなるばかりだ。」

『大変危険です！』

「おいおい、ホント大丈夫かよ！？」

友人はもう顔色もない。

「だついじょぶだつて！ パトカー、20〜30台くらい待ち構えてるんだろ、きつと」

三船の表情は見えない。

はたして、前方にパトカーのライトやバリケードが見え出した。警官らしき姿も見える。赤く光る棒や、それから…

「おいおいおいっ！ あれ銃、持ってないか！？ ってか、構えてないか〜！」

友人は半狂乱である。

「大丈夫」

突然、銀色の小箱から鋭い光が打ち出され、遠くに見える赤いライトの塊を嘗め回した。一瞬の静寂のあと、大爆発の中を三船の車は突き抜けていった。

「三船お前、な、なにやつたん」

氷のように固まった友人に三船は悠然と言った。

「な、大丈夫だったろ？ この機械、新型だもん。」

<おしまい。>

小咄其の拾六 『ほんものの…』

「うーむ困った。」

「どうしたんスか？ 鶏冠部長とんか」

ここはとある食品会社。営業部長と部下が人目もはばからず何やらきな臭い話をしている。

「おお、牛尾君か。我が社で販売している『霧ノ中牛』なんだが、実は… 国産のものなんだよ」

「…それって今流行りの食品偽装ってヤツ？ まずいッスよ部長！」

「それと賞味期限も少し延ばしててな」

「マジ？」

「たまに豚とか混ぜてるんだが」

「ガチ？」

「君はどこかの元総理の孫か？ とにかく今でさえ味がよろしくないと返品が多いし、在庫もわんさかだ。しかし長年売り続けた『霧ノ中牛』、なんとかブランド名は残したいのだ。」

「うーん、難しいっスねえ。とりあえずのど乾いたんでコーラ飲んでいいっすか？」

のんきにノロノロ飲み物を探す牛尾。鶏冠もそれこそ鶏冠に来た… 怒り心頭に発した。

「 バツカモーン！ お前はなんでそう緊張感がないのだ？ くそ、ゼロカロリーだかなんだか知らんが 似たような飲み物ばかり出て… あ”！」

鶏冠部長はぼん、と手を叩く。

こうして食肉加工業『モンタナ吉凶』（仮名）から登場した新ブランド『霧ノ中牛0（ゼロ）』は、パッケージも新しく『国産0%』を堂々と標記した画期的なものであった。

…もちろん、誰も信用度0%の肉を買おうとはしなかった。

<おしまい。>

小咄其の拾七 『心霊写真』

「この前の合コンの時の写真な、やっぱおかしいわ。ここ、どー見ても人の顔。しかもごつつうニランどるし」

大学生の鬼形きがた百太郎は震える手で写真を取り出した。合コンの会場で数人の友人のなか、自分の肩のところに浮かぶ白いもやを指差す。昔から鬼形はそういう体質：というか、写真を撮られれば心霊写真らしきものになることが多かった。カメラでも、デジカメでも。いつしかカメラを遠ざけるようになり、たまに撮られる集合写真でも、気難しい、青ざめた顔で写っているものばかりであった。

「なに言うてんねん、こんなナニか反射しとるだけやん。よくある見い間あ違いつ」

悪友は笑い飛ばした。

「だいたい自分、そない陰々滅々としとつたら柳もユーレイに見えるでホンマ」

「そ、そうかな？ 気のせいかなあ？」

他の友人も言う。

「せやせや、笑って見直してみい、みな楽しそーにしとるし！」

「う、うんうん」

鬼形もだんだんその気になってきた。

「そ、そやなー、気にし過ぎやなー。わは、わは、ははは」

写真の中では悪友たちは笑っている。神経質そうに見えた鬼形百太郎の顔も今度は笑って見える。他のみんな楽しそうだ。

「やっぱ見間違いや。あは、あはは！ ほなみんな、今夜も合コン、行くで〜！」

気の早いやつちやな、と皆に突っ込まれながら、鬼形は写真をまた見直した。

鬼形のとなりのもやも、明らかに人の顔で『にやり』と笑って
いた。

<おしまい。>

小咄其の拾八 『ダイニングメッセージ』

人里放れたロッジの一室で殺人は起きた。殺害現場に遺留品はなく、ただ床には被害者のものと思われる血の文字が書き連ねてあった。

正 正 正 一

「鶏冠警部、こりゃ、何を表してるんでしょネ？」
「正」の漢字が三つ、『一』がひとつ。」

部下の新米刑事、牛尾に呆れ顔で鶏冠警部は言った。

「馬鹿だねお前は。お前も刑事なら聞いたことあるだろ？
ダイニング・メッセージってやつだ。」

「え、ダイニング・キッチンっすか？」

「あのなあ…。これはガイシヤが死ぬ前に残すお約束だ。きっとここに犯人のヒントがあるはずだ。そして『正』といえば…数のかぞえ方に決まってるだろ！ 画数で正は五なんだから、犯人は5×3+1、つまり16人いたんだ。」

「ええ〜っ、いくらなんでもそりゃ多すぎる。うーん、きつとホシに刺された回数だ！」

「ますます馬鹿だなお前は。そんなの悠長に数えてる暇があったら逃げるだろ普通。これは助けが来るのを心待ちにしていた日数だ。16日間も待つてたんだなあ。」

「…そしたら腐ってますよ、ホトケさん。携帯とか、持ってなかったのかな？」

鶏冠警部はぽんつと膝を叩いた。

「そうか！ 携帯の番号かもしれん。とにかく16に関係がありそうなものすべて調べる。これで事件も解決だーっ！」

数日後、犯人の正正正一ただまさしゅうちちが自首してきた。

<おしまい。>

小咄其の拾九 『ながい髪』 (前書き)

(けっこう怖い話のつもりなのでご注意ください)

小咄其の拾九 『ながい髪』

整えた髪からするり、とヘアブラシをひきぬく。途端に男は険しい顔になった。

(まただ…)

50センチはあろうか、長い黒髪がブラシには巻き付いていた。

心当たりがない訳ではない。

肩まで伸ばした茶髪に端正な顔立ち。男はかなりもてるほうである。言い寄って来た女性も多いし、現に今も二股をかけた女のマンションから朝帰りをし、身支度をしていたところである。

「あの女、こんなに髪が長かったっけ？」

男はからまつた髪を洗面所に投げ捨てた。

男は女癖が悪いのは変わらなかったが、いつからかセミロング、ショートヘア女性とばかり付き合うようになった。時には無理やり髪を切らせることすら。それでも

するり。

「なんだよ！ どいつの髪の毛なんだ？」

髪をすくブラシや指にからまる長い黒髪。男は日増しに神経質になっていった。ナンパや合コンの回数が減り、盛り場に悪友と行く回数も増える。そんな時、遊び仲間が酒場でひそひそ話すが聞こえた。

「×××、あの子やつぱり自殺なんだってな。」

「ああ、あの長い髪の…」

「！」

男は二人につかみかかるように女のことを聞いた。

「な、なんだよ、お前が前に付き合っていた子じゃないか」

「振られたせいじゃねえの？」

思い出せない。

確かにそんな女もいたが、顔すら覚えていない。平凡な、特徴もない、ありきたりの……。だが、確かに見事な黒髪だった。それだけは記憶にある。男は息せききってマンションへ戻った。言いようのない不安感、恐怖。ドアの鍵を閉め、顔を洗い、ばりばりと髪をかき乱す。

(いったい、なんだってんだ?)

そんな髪の毛しか特徴のない奴なんか、振られて当然だし、忘れられても仕方がない。そう思い込もうとし、自分の茶髪からかき乱した指を抜く。

ずるり。

黒髪が大量に引き出された。

「う、うわああああー！」

男は必死にからみつく黒髪を引き抜こうとした。

ずるり、ずる。

震える手にそれは生きているかのようにまとわりつく。どうして捨てるのか?、と非難するように。

「ひ、ひ、ひいいッ! だ、誰なんだよ!」

男の悲鳴が絶叫に変わる時。

ずるうり。

男の頭部から、黒髪とともに女の頭部と、額と、恨めしげな目をした顔の一部が現れた。

男は思い出した。「それ」が誰で、どんな顔をしていたかを。どれだけ髪を大事にしていたかを。髪の毛だけに執着する女に嫌気がさして、ひどい悪態をつき女を捨てたかを。

崩壊する意識のなか、男は思い出した。

<おしまい。>

小咄其の貳拾 『なんだか着信あり?』

香ばしい炭火とタレの香りが広がる。

「どうもね、出るらしいつよよ、 養鶏場に」

夜道、焼き鳥を頬張りながら話しを続ける男が二人。

「何が?」

胡散臭そうに鶏冠とけいは後輩の牛尾うしおのひそひそ話しを聞いた。

「鶏が…」

「馬鹿だねお前は。前から馬鹿だ馬鹿だと思っていたがますます馬鹿だ。鶏が養鶏場にいるなんて常識たるが」

「じゃなくて、出るんつよよ! ウイルスをうつされ、不当に処分された鶏の霊が。」

焼き鳥の串を振りつつ牛尾くんが叫んだ。

「なこと言ったらそこ等中動物霊ばかりだろ。天をも貫く馬鹿だねお前は」

今食べている櫛を置き、鶏冠は毒づいた。

「どうもそこ、卵の賞味期限や出荷場所の誤魔化しまでしてたそうで。食われちゃーイヤンなるでしょうけど、死んだ後さえ扱いが悪ケリゃ、そりゃ家畜だってグレるってなもんです。」

「そんなもんかなあ?」

「悪徳商人の携帯に、誰だかわからん着信が入って、何だかわからんうちにメッセージを聞くと…」

「聞くと?」

その時、いきなり鶏冠の携帯が鳴った。『着信あり』の通知。さすがにタイミングが悪すぎて取らずにいる。

「元気な声で『コケコッコ』と鶏の声が聞こえるんですと。すると背後の闇から、羽毛をざわめかせ、逆さになって天井をすーっと

迫って…人とも思えぬ顔の霊が！」

再び着信ありの表示が光り、いきなり雄鶏の甲高い声が夜だというのに響き渡った！

「うわぎゃーっ！！！」

* * * * *

「…というような都市伝説を聞いたんスよー。怖いっス鶏冠先輩」

「馬鹿だねお前は。鶏が人とは思えぬ顔をしているのは当然だろーが。人面鳥の方がよほど怖い。前から馬鹿だ馬鹿だと思っていたが天高く馬肥ゆる馬鹿だ。馬鹿はゾンビになっても治らない」

鶏冠先輩は後輩の牛尾くんを罵倒するのに余念がない。

「おおかた鶏を解体用に吊るした物でも見てビビったヤツのほら話だろ。いいから早く退散するぞ、折角牛井のレトルトパック、ぶん盗ったんだからな」

「へい、ずいぶんみみっちい泥棒っスね俺たち」

その時。

鶏冠の着信が鳴った。ゆっくり携帯を取り出し、耳をあてると

「モー」

と鳴き声が聞こえた。

<おしまい。>

小咄其の貳拾壹 『カマドウマの夜』

第十八話 カマドウマの夜

ちよつと昔むかし。ある山奥の村に、マタギの半平太という男が住んでいた。狩りを終えて帰ってきた半平太。熊をも恐れぬ勇猛なマタギだが、土間の暗がりにかサカサと動く小さな影にびくつと震え飛び上がった。

「ひつ・・・なんだ、ネズミだか。脅かすんでねえ」

彼はある虫が嫌いだつた。文字通り、虫が好かないというやつである。畑も耕す彼は害虫だろうが毒虫だろうが怖くはない。ただ…

カマドウマだけは特別だ。以前疫病で死んだ隣の爺さんと同じような、不健康な肌色の体皮。茶色く浮かんだ痣かシミのような模様。便所コオロギのあだ名の通り、わざわざ不快な場所を好んで住み着く。

そのくせ、これがまた元気なのである。まるまると太った胴体やむやみに長い脚。それがぴょーんつと跳ねる。跳ねて迫ってくる。そのくせ叩けばすぐ死ぬ。その極端さがどうしても許せないのである。

びょん。

そして、今夜もそいつは薄暗がりからやって来た。

「しっしっ！ あっちさ行け！」

追い払えば、不思議と寄ってくるものだ。半平太は手元の薪を投げつけた。跳ねて逃げ回るカマドウマ。少しするとまた戻ってくる。業を煮やした彼は猟銃を取り出した…とたん、
びょん！

「う、うわぎゃーっつ！」

カマドウマはオソロシイ跳躍力で半平太の顔めがけて飛び掛り、見

事彼の鼻の頭に着地した。目を白黒させて鼻の上を凝視する、と。

「ワシもお前が嫌いじゃよ」

その虫はシミだらけの老人の顔を憎々しげに歪ませ、そう言い放つとまた、ぴょーんっと飛んで逃げていった。

・・・おしまい。

小咄其の貳拾貳 『対岸の火事』

「最近イヤンとダメリカ合衆国の戦争が終わってから、どうよ。なんか変わった？」

蕎麦をすすりながらごく普通の会社員、緒佐間君が友人に問いかける。

「いやあ変わらんない。不景気も一緒だし、なんか知らん間に税金増えてるし。」

テレビを見ながらごく普通の会社員、布施君が答える。ごく普通の昼食時間、会社近くの蕎麦屋さんで。

「だよな。いくら戦争があつたつて言つても、俺っちの国じゃ関係ないよね。…んで、なんのニュース見てんの？」

「またゲーム会社が合併、弱小銀行は大手銀行が吸収だとき。ニンテンスクエニセガ、タイヨウコウベミツイアサヒスミツ…うー、覚えきれん。生き残るため、かねえ…」

二人はお互いの話を興味もなさげに聞き、適当に返答する。

「うん？」

布施君がテレビを見上げる。政府の見解で、よく見る政治の代表者が口をひん曲げながら話している。緒佐間君も見上げた。

「なあ、総理大臣、いまいいこと言つた。ダメリカへの渡航、パスポートなしでOKになったとき。大リーグもすぐ観られるゾ」

「ふんふん、関税もなし？ 首相、よほど戦後支援したんかな？俺たちの税金で」

「んなコト気にすんなつて。どうせ誰がやつても政治なんざたいして変わらんし。とにかくこれで合衆国にも行きやすくなつたない。俺たちホントのダメリカ国人みたい。なはははは」

「オーイエー、わははは！」

二人は声をあげて笑い、蕎麦を食った。テレビでは、『合衆国
日本”州』知事となり下がった政治家が、口をひん曲げ誇らしげに
雄弁を振るっていた…。

<おしまい。>

小咄其の貳拾參 『ビューティコロシム』

「最近のナオミはどんな顔だ？ 母さん」

シヨーン「コネリーそっくりの顔で大塚ケンイチ（仮名）さんは妻のヒロミさんに聞いた。

「さくねえ、今年に入ってからはあんまりしてないみたいよ、整形手術。携帯代が掛かってるからって」

ヒロミさんはオードリー「ヘプバーンの顔でモンローの胸を揺らし、応えた。

「最近はず整形も飽きられたのかな？ ワシらの若い頃はみなこぞってアイドルや俳優の顔や体に憧れて、月に2度も3度も整形したのに。」

「はいはい。あなた私との見合いの時も『親と顔つきが違う』って私が言ったら、親の顔まで整形させたもんねえ…」

「だいたい近頃の若いモンは決断力もないし軟弱すぎる。何故親からもらった大事な体をもつと改良しようとせんだ？」

ケンイチさんはシュワルツネツガーの腕を振り上げて叫んだ。

「がちやり、と玄関で音がする。

「ちょうどその時直美さんがマスクとサングラスをしたまま帰宅し、2階の部屋に行こうとしていた。

「待ちなさい、整形したなら顔を見せておきなさい。お客と間違えるだろ。またワケの分からない外タレか何かか？」

ナオミはのろのろと応えた。

「私こういうの決めるのってメンドくてえ、なかなか一つにしぼれないからあ」

彼女はゆっくりと、マスクとサングラスを外した。

「この次きめよーと思ってえ…」

頬に青い目が二つ、高く通った鼻がひとつ、ナオミの顔には余分に付いていた。

< . . . おしまい。 >

小咄其の貳拾四 『就活』

「本当にこんな好条件で、俺なんか採用してくれるんスカ？」

会社説明会で。就活中の半平太君は思わず叫んだ。

「もちろんです」

人事担当の男はにっこり笑った。

「だって…あ、し、失礼しました。そ、そちらは世界で名立たる有名製薬会社ですよ。こんな俺みたいな三流大卒の取り得もない負け組みを…いや、その」

緊張してうまく喋れず、失言ばかり繰り返す彼を見ても人事の男は対応を変えない。

「大丈夫です。あなたは生涯当社の保険で暮らすことが出来ます。

仕事は単純なものですし、お住まいも食事も提供致します。…どうです？」

「はい！ 行きます入ります、やったア俺もエリートサラリーマンだああ！」

人事の誓約書を読むこともなくOKを出し、入社日を尋ねる半平太。なんと今から職場に案内するという。契約書を交わし、ビルの地下に行くと…金庫のような鍵のついた部屋があった。

「あの、ここ、なんの仕事を？」

実験室のような、薄暗い部屋。薬品と血のまざった匂い。奥にはさらに頑丈な鍵がついた扉が。

「当社の新開発した薬品を定期的に投与します。後は経過を我々が見るだけ。なに、あなたは何の心配もいりません。いや…心配する気持ちもなくなりますし…」

人事の男が薄く笑った。

「は、はあ…」

半平太君は、ちょっと適性が合わないかな、と考えた。

奥の部屋の鍵が外され、扉が開く。人と獣が混ざり合ったような唸り声、叫び声、もろもろが聞こえてきた。

<おしまい。>

小咄其の貳拾伍 『太陽がくれた季節』

じりじりとアスファルトも溶け出す午後。

「しかしどうよこの暑さ！ いきなり夏が戻ってくるんだもんなあ。

」
溶けたフラッペの残りをスプーンでかき混ぜ、杉裏太陽くんは毒づいた。

「ほーんと。なんだか紫外線、強くない？ なんだか火ぶくれみたいなの、出来てるしー。」

彼女の吹雪一恵さんも汗を拭きながら、二の腕にぷっくり膨れ上がったデキモノを睨んだ。つやつやと、ピンクに膨れ上がったそれは杉裏くんのかっこうの餌食になった。コネコネとスプーンでデキモノを弄ぶ。すると。

ぱん！

いきなりそれは破裂した。が、

「何すんのよ！ …あれっ？ 膿も血も出ないわ。『何も無い』わ。なんだか変なの。」

「まるで風船みたいだなあ。やっぱり異常気象とか、オゾンなんたらが環境うつんたら、つてヤツか？」

「わかんない。でもなんだか面白いかもー。」

その後も変なデキモノはそこかしこに膨れ、つつけば破裂した。彼女だけではない、ほとんどの人がデキモノをぱんぱんやっていた。

暑さのせいだろうか。痩せた人が目立つようになったころ、不思議なデキモノはどこにも、誰にも見えなくなっていた。面白くない

のは杉裏くんである。自分にも吹雪さんにも「暇つぶし」「は見つか
らない。

「あー暑いしまらんし！ またアレ、ぱーんって出来んかなあ」「
タコヤキの爪楊枝を振りながら毒づく。その時。背後で「ぱん」「っ
と音がする。

「あれ、一恵またデキモノ…?」「
吹雪さんがいない。

「? どこ行ったんかなあ。」「
てもちぶたさに、ピンクでつやつやと膨れた自分の頬に楊枝を立て
た。

ぱん！

破裂音とともに杉裏くんの服だけが残った。

<おしまい。>

小咄其の貳拾六 『愚者の贈り物』

あるところに年の離れた夫婦がいた。

女は美しいがたいそう派手好きで遊び好き。男は若いだけがとりえ。男は彼女のために夜も寝ずに働き、プレゼントを欠かすことはなかった。それでも女の欲望の泉は潤うことはなかった。

「やっぱりあんたみたいなきだけ男じゃ駄目ね」

そう言われるたびに男は必死で彼女に応えようとした。

そんな二人も年を取った。これで遊び癖も落ち着くかと男は思ったが…

「私は若さを取り戻したいわ」

と女が言い出した。

「そんなあ」

あらゆる方法を探したが効果はなく、とうとう金も住まいも無くした男。

「はあ…どうしたらいいんだろう？ 彼女の願いがかなうなら命だつて掛けるのに」

その時、暗がりから唐突に嘔れ声がした。

「ぎゃつぎゃつぎゃつ。それなら話が早い。オレと取り引きしろ」
現れたその黒い影は、世間一般に言う「悪魔」の姿をしていた。

「ひいっ！ あ、あんた悪魔か？ 取り引きつて…ままっまさか俺の命と引き換えに、つて？ そ、それじゃ困るよお」

神も仏もない、という顔で男は泣いた。

「なに恐れることはない。お前の強い愛情に感激しただけさ。ちょっと辛いが、命まで取りはしない。彼女の若返りは約束しよう。さ、取り引きしろぎゃつぎゃつぎゃつ。」

「う、ううん」

結局、男は悪魔と取引をすることにした。はたして女は若返り、

命の躍動に満ちた美しさを取り戻した。代わりに男は命までは取れなかったが、見る影もなく老け込んでしまった。再び遊びに行こうとする女。それを寂しそうに見送る男を、女はまじまじと見つめた。

「あなた…あなた、なんて素敵なの。そんな切ない目で私を見ていたなんて」

「お、お前…！」

年を重ねた陰のある男の容姿に、女はいつぺんに恋に落ちた。二人は揃って年上趣味だったのである。

二人の願いはかなった。お互い他人のことを思わぬ自分本位の贈り物によって。

<おしまい。>

小咄其の式拾六 『愚者の贈り物』 (後書き)

おまけ

それでは悪魔は本当に慈善事業をしたのだろうか？

「ぎゃつぎゃつぎゃつ。オレはちよつとだけ寿命のパイプをつなぎ代えただけ。一番コストのかからない魔法さ。」

男は間もなく寿命で死ぬから不当に命を取るわけじゃあない。女は最愛の伴侶を見つけた途端、長い後悔の余生を送る。死と不幸、一挙両得つてわけ。ぎゃーつぎゃつぎゃつ。」

< ホントにおしまい。 >

小咄其の貳拾七 『abduction』

あるUFO研究者は言う。

「宇宙人はUFOで人類を拉致し、実験後に記憶を操作し戻している」

と。それに対し科学者たちリアリストは反論する。

「数光年もかかる宇宙を行き来してそんなことをする意味があるか？ そもそも宇宙に知的生命が存在する可能性はあるが、確実ではないというのに」

云々。

何故、彼等はやって来るのか。

やまおくけん いなかむら
山奥伊那香村で。

「おつかあ、ありや何だべ？」

畑仕事に精を出していた朝青隆あさあおたかしさんは天を仰ぐ。

「なんじやるねえ。」

90度に曲がっている腰を3度ほど傾け、年老いた母も見上げる。

そこには…銀色に光る謎の円盤が高速で回転し浮遊していた。二人があっけに取られていると、円盤はゆっくりと着地し、中から…

いかつい灰色の人が、まわし一本の姿で塩を巻きながら現れた。

「オマエ、勝負シロ！」

四股を踏みながら叫ぶ。どうも相撲をとりたらしい。

「なんだあ、おめえ？ オラを村一番の相撲取りと知ってんのか？」

朝青さんの問いに耳を傾けもせず、灰色の人はやる気満々である。

「行クゾ！ ハツケヨイ…」

つられて朝青さんも四股を踏み、かまえ…

すこしして。

朝青さんはいつものように畑仕事を終え、一服していた。

「おつかあ、なんだか小一時間くれえ、野良仕事していた時間が合わねえ気がすんだがよ？」

「ほええ、そうかいねえ？ 忘れちまったのお」

「ダカラ言ツタダ。アンナ未開ノ惑星ノ原住民達ニ、ソノマタ民間芸能ノヨウナスポーツデ勝ツナンテ無理ダツテ」

円盤の中、灰色の小さな人が、ボコボコにされた友人の治療をしながらボヤいた。

「ウルサイ！ 今度こそ勝テルト思ツタノニ。次こそハ…！」

「ソレカラ負けタカラツテ、原住民ノ記憶リセットスルノ止メ口。」

灰色の人はすごい負けず嫌いだった。

彼等はやって来る。越えられない壁が、見果てぬ夢がある限り。

<おしまい。>

小咄其の貳拾七 『abduction』（後書き）

アブダクション
abduction

|| 誘拐、人さらい、拉致。

地球外生命体（エイリアン・宇宙人）に誘拐されることも意味する。

小咄其の式拾八 『魔法使い堀田半平』

ここはとある魔法学校。生徒の堀田半平ことハンペー「ホッターくんは学友たちと夏休み前の教室で歓談していた。

「しかしこの学校、生徒がうじゃうじゃいよるなー。こいつら皆魔法使いになるっちゅうんかい？」

「いや、けっこう出口は狭いらしいで〜」

赤毛の友人が言った。

「せやなー、こんだけぎょうさん魔法使いおったらかなわんわ。…あ、でも」

堀田くん、丸い眼鏡をくいつと上げる。何か思いついたようだ。

「わしら全員で魔法つこたら、世界なんかあっちゅー間に思い通りに出来るんと、ちやうやるか？」

「うんうん」

赤毛も乗り気でうなづく。

「アホなこと考えんとき。ほら、スネーキー先生が来たで！」

しつかり者の堀田くんのガールフレンドがよからぬ企みに水をさす。三人が席につくや否や、先生が現れた。

「えー、皆さん、夏休みを前に課題を出します。みんなが一人前の魔法使いになる大切な試練です」

無表情な先生はそう言って皆にリング状の物を渡し、首に付けるよう促した。

「我々魔法を使える者は世間から見れば異分子です。昔から魔女狩りの例もあり、やつかい者なわけですな。じゃあ、何故我等は生き延びていられるのか？」

皆、休み前のお説教を興味なさげに聞いている。スネーキー先生はさらに続けた。

「魔法でうまくことをやろう、と考える者を駆逐するためです。

さあ、今から魔法合戦です。逃げようとした者はリングに付いている”愚者の石”が爆発する仕掛けになっています。君たちは”秘密の部屋”の”囚人”なわけ。なはははは

スネーキー先生はたいして面白くもなさそうに笑った。

「な、なんやっちゅーねん…」

堀田くんをはじめ全員が絶句する中、先生は首をカクカク揺らし、なはなは笑いながら言った。

「では、BR（バトル＝ロワイヤル）法、すたーと」

<おしまい。>

小咄其の式拾九 『続々・正義の味方』

「怪獣だー！」

月形半平太は叫び声に振り向くと、そこには小山のような怪獣が立ちはだかつていた。静かな街に唐突に現れた怪獣に逃げ惑う人々。絶体絶命である！

…と、そこにまた唐突に銀色の巨人が立ち塞がった。ライオンのような髪型に細い目が輝く。

「あ、あれは…」

どこかで見たような、と、半平太が思ったとき。

ずばしゅ。

あつという間に巨人は怪光線で怪獣を粉碎してしまった。タメも威嚇も戦闘もない。一発で終わりである。子供が見たら不満だろうし大人が見ても力ネカエセ状態だ。だが巨人は満足げに頷き、何か演説を始めた。

「なんかジユワジユワ言ってるけど」

そう言えば、よく政権放送でお見掛けする人そっくりの話しっぷりだ。

「あれは『この怪獣は大量破壊兵器を隠していた、だから先制攻撃をした』と言っておるのだ」

これまた唐突に半平太の隣に銀色に輝く男が現れた。

「うわ！ あんた誰？」

「私が銀河うるとら組々長ソフィーなのだ」

なのだと言われてもそうですかとしか答えようもない。

「あの巨人…あれ、超スーパーうるとらマン？ どう見ても元総理

のコイズミ……」

「わははは、あまり気にするな」

ソフィーはニコニコである。

「でも今の選挙じゃ叩かれてるぜ？ 正義の味方って嘘つきにはなれないんじゃない？」

「彼等政治家は嘘つきではない。と言うより嘘をついている自覚がない。嘘をつく時の罪悪感が正義と悪のバロメーターになるのだが、彼等政治家にはそれが微塵もないのだ。行ってもいない大学だって平気で首席卒業だ。逆に大きな嘘ほど『政治的手腕が高い』と賞賛されるらしいぞ」

よほど、適任者が見つかったのが嬉しいらしい。まだジョワジョワ言ってる巨人の言葉をソフィーはさらに通訳した。

「君も超スーパーうるたらマンの兄弟にならないか？ 正義のためにいるんなところで戦うのだ。なに派遣する先は非戦闘区域で怪獣も出ない……」

「……うそだ」

<おしまい。>

小咄其の参拾 『地下鉄の顔』 (前書き)

今回で一区切りです。少々奇妙で怖いかも。ご注意ください。

小咄其の参拾 『地下鉄の顔』

夕方の地下鉄。

あわただしく人が行き交う中、帰り道を急ぐ私は、視線の端に奇妙なものを認めた。

・・・男の、顔だ。

何処にでもいそうな平凡な顔の男。ぎよつとしたのは首だけが浮いているように見えたからだ。よく見れば通路の途中の壁の窪みに身体をうずめているようだ。そこから首だけをひよっこりと出している。同色の壁と背景の間に見えるごくありふれた中年男性の顔。目だけがくるくる動いている。

すると、すいっと手が壁から出てきた。

帰宅ラッシュ、響くアナウンス、喧噪。人は皆、そんな男を振り向いたりはしない。足早に通り過ぎるだけだ。首と手の男はすごく落胆したような顔になる、が、すぐもとの目をまわす素頓狂な顔に戻った。手招きをするような仕草をしたり、耳打ちをするように口元に手を近づけたりしている。

さも「お得ですよ」とでも言うように。

発車のベルが鳴る。遠目に見ていた私も時間に追われる身だ。その場を離れようとした。

その時。

会社員だろうか。さえない初老の男性が壁の男にふらふらと、近づいていった。

そのまま壁の窪みに誘われるように首と手を前に出す。さっきと逆に身体だけが壁から出ているようだ。

私は何故か目が離せなかった。中年男はそのまま動かない。喧噪も聞こえない。

しばらくして、

その身体は壁の窪みから抜け出した。それは、

それは

目がくるくると動いている。手招きをしていた男の顔だった。嬉しそうに、本当に嬉しそうに男は、こちらを向き、私を見た。そして

手招きをした。

<おしまい。>

小咄其の参拾 『地下鉄の顔』（後書き）

ご愛読ありがとうございます。一応、今回が最終話とさせていた
だきました。以前のアクセス解析が30話までだったので。今回ギ
ヤグがないです。棒球です（苦笑）。そのうちまた同タイプでお目
にかかれればと思います。感想とか頂けるとありがたいです。それ
では、また（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7207g/>

ちょっと怖い小咄

2010年10月11日13時44分発行